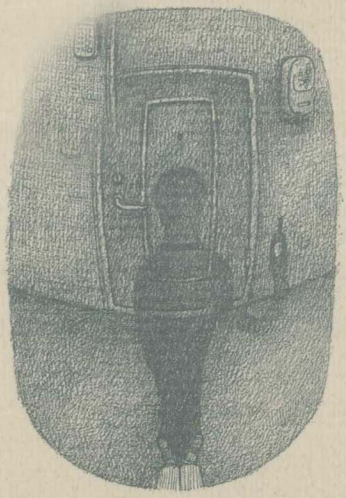
昔の部屋

出久根達郎



昔の部屋

筑摩書房

昔の部屋

二〇〇〇年八月二十五日
初版第一刷発行

著　者　出久根達郎
画　　出久根育
装　幀　岡田和子
発行者　菊池明郎
発行所　筑摩書房
東京都台東区蔵前二-五-三
郵便番号　一一一-八七五五
振替　〇〇一六〇-八-四一二三

印　刷　三松堂印刷
製　本　矢嶋製本

© TATSURO DEKUNE
ISBN4-480-80357-2 C0093　Printed in Japan
乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが左記に御送付下さい。送料小社負担にてお取替え致します。
ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。
〒三三一-八五〇七　大宮市櫛引町二-六〇四
筑摩書房サービスセンター
電話番号　〇四八-六五一-〇〇五三

目次

かぶれる……3
紐……39
忍ぶ恋……55
黒い池……75
昔の部屋……85
昔の小説——あとがき……206

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

かぶれる

浩吉が中学をおえる寸前、父が交通事故で死んだ。自分の不注意で起こした自分だけの事故で、全くの死に損だった。交通遺児を助けるための制度もない時代で、四人兄妹の総領である浩吉が働き手にならねば、一家が飢え死する。

浩吉の向学心を惜しんだ担任が、どうせ就職するなら、と大学時代に懇意だった東京の古本屋を世話してくれた。高校に通わなくとも、勉強できるだろう、という親心であった。給料は住込みで手取り三千円。浩吉は上京した。

東京下町の、三代続く老舗（しにせ）である。主人は着物にモンペ姿（実はたっつけという、袴（はかま）の一種と、のちに知った）の老人で、一見、棟梁（とうりょう）のような人であった。髪も職人刈りである。

永井荷風の著書を出して、作者名を読んでみろ、と言った。浩吉は頭をひねったのち、「ナガイニフウですか」と答えた。本当はナガイカフウと読むのである。浩吉は間違ったのだが、主人は「よく読めた」とほめた。中学生で荷をニと読める子が昨今は少ない、君は上出来だ、

と持ちあげた。それが試験であった。

「いいかい。しかしこの人の場合は、カフウと読む。人名や書名は特殊だからね。古本屋の勉強は、まずその正確な読みを覚えることから始まる。次にこの人がどんな作品を書いているのか調べ、一つ二つ読んでみる。いいかい」

「はい」と浩吉はうなずいた。いいかい、と念を押すような言い方が、主人の口癖であった。

浩吉は早速その荷風の著作を開いてみた。『墨東綺譚』という小説だが、全然面白くもおかしくもなかった。ちんぷんかんぷん、といってよかった。田舎者（いなかもの）の浩吉には、どこの国の話か、という感じで、半ばに至らず投げだしてしまった。年寄りの古本屋が客に応対する場面だけが、わずかに気を引いた。老古本屋の口調が、どことなく主人をほうふつさせたからである。

江戸のなごりを漂わせる荷風の世界が、ポット出に通じないのも無理なかったが、もう一つ、年の割りに浩吉は子供すぎた。未熟児で生まれたせいで、成長が遅い。男女のことに全く関心が向かなかった。

それだけに性格が素直で明るく、主人をはじめ店の仲間にかわいがられた。仲間は五人いた。皆、浩吉より年上で、十八歳から二十歳。店の二階と屋根裏部屋に二人ずつ住み込んでいる。浩吉は一番年かさの栄三という男と、相部屋を命じられた。仕事も同じ部屋の者と組んでこなす。店番と外売りと仕入れ、そのほか客への届け物、買入れの勧誘やチラシ配りなど、浩吉は

栄三と行動を共にした。
栄三は主人の目の届く所では、調子よく立ち回ったが、蔭に入ると、いい加減な怠け者であった。頭をポマードで光らせ、きっちりと七三に分けている。ポケットに女物の櫛を忍ばせており、一本でも毛が乱れると、すかさず取りだして撫でつけた。紙は手を荒らす、とぼやきながら、しょっちゅう桃の花というクリームを塗っていた。それもポケットに忍ばせていた。
店を閉め、銭湯に行く。やはり二人は一緒だった。浩吉は、いろんな作法を栄三から教わった。寝床に腹這って浩吉が荷風の本を開いていると、
「そんな小説は甘いぜ。こっちの方がもっと強烈だ」と栄三が薄い、書名も作者名もない冊子を投げてよこした。浩吉が手を伸ばすと、
「おっと。未成年には早い。目の毒だ」とす早く取りあげた。
「なんの本ですか？」
「面白い本さ。表だって売れない小説だよ」
「そんな小説があるんですか？」
「大ありさ。大っぴらに売れないから、旦那は弱っている。うちの旦那は、まじめだからね」
「はあ」と浩吉には、ピンとこない。
「旦那の部屋の隣は仏間だが、あそこに皆溜めてある。この手の本は結構入ってくるんだ。客

から本を買うだろう？　その中に混(まじ)っている。それが積もり積もって何百冊。もったいない。あの部屋は宝の山だ」

ニヤリ、とほくそ笑んだ。

「この本も黙って拝借してきたんだが、読み終ったら、また仏間に戻しとくのさ。内緒だぜ。おれがこっそり仏間に出入りしていることが知れたら、これだからね」と首に手をやった。

「黙っています」浩吉はうなずいた。

「今度、五目ソバをおごってやるよ。うで卵がまるまる一個、つゆに浮かんでいるんだぜ。田舎もんには、おいそれと味わえない高級品だ」ともったいぶった。

月に一回の定休日だが、浩吉には初めての休日に、栄三は約束通り、上野の中華料理店に連れて行ってくれた。

料理屋に入る前、栄三は駅裏の仕舞屋(しもたや)に立ち寄った。浩吉を表に待たせておき、入ったかと思うと、すぐに出てきた。出てくる時、左右に目を走らせた。

栄三の自慢通りの五目ソバであった。浩吉が舌鼓(したつづみ)を打つと、

「あした旦那と奥さんは、嫁に行った娘の所に遊びに出かけるそうだ。大阪だ。孫の顔が見たくなったんだろう。一週間ほど留守にするそうだ」

栄三は年長者ゆえ、番頭役を任じられている。

「それで、だ。おれも明日、田舎に帰る。お袋が倒れたからな」
「えっ？　本当ですか？」
「口実だよ。店の連中にお前からそう言っておけ。いいな。なあに、旦那たちが帰る前に戻ってくる。内緒だぜ。誰にも本当のことをバラすなよ」
五目ソバは、口止め料だったのだ。
翌日、旦那たちが出発すると、栄三が装いを改め、髪をいつもより念入りに撫でつけ、小さなバッグを下げて、予告通りどこかに消えてしまった。ところが他の者も、浩吉に店番を押しつけて、いつのまにか居なくなった。栄三が口実を設けるまでもない。皆、先刻承知で、誰もが主人の留守を狙っていたのだ。あとには新米の浩吉と、お手伝いのトネという老女だけが残された。
鬼の居ぬ間の洗濯に出かけた連中は、夜、店を閉めるころ、てんでんに戻ってきた。栄三だけは泊まりがけだから戻らない。
「どうだった、浩吉。一人で留守番は骨が折れたか？」栄三の次に年をくった、五郎という男が聞いた。
「お客さんが本を売りにきたらどうしよう、とびくびくしていました」浩吉は正直に答えた。初めての経験である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「これも修業のうちだ。人を頼っていては、いつまでたっても覚えられない。勉強と思って、度胸をつけろ。お前のためだぞ」

恩に着せた。

そしてその翌日も、浩吉を一人ぼっち店に張りつけ、連中は、めかしこんで遊びに出かけた。古参のトネには、ぬけめなく鼻薬を利かせていた。

古本屋という商売は、暇なものである。客からの買い入れさえ除けば、普通の店屋の番と同じで、来客にいちいち挨拶を送らぬ分、気楽であった。二日目ともなると浩吉も慣れてきた。店番をしながら、本を読む余裕も生まれた。身構える必要は、ないのである。

隣のラーメン屋から、「南国土佐を後にして」という近頃はやりの歌が聞こえてくる。客が出入りするたび、音が大きくもれる。ぼんやりと目で活字を追いながら、あ、また客が入ったようだ、大変な繁盛ぶりだ、と耳でよその銭勘定をしている。それにひきかえ、わが店のていたらく。閑古鳥が鳴きしきっている。

はっ、として顔を上げると、目の前に人が立っていた。一瞬、旦那かと錯覚した。旦那のような髪型、それに旦那がいつも着ている柄そっくりの着物姿だったからだ。しかし主人よりずっと若い男だった。

三十代と思われるその人は着流しに、雪駄をはいていた。浩吉はあわてて用件をうかがった。

「栄三さんは留守？」
「はい」
「弱ったな」男は手にした風呂敷包みを持ちかえた。
「いつ、戻る」
「あの。四、五日帰らないということです。田舎に帰りました」
「まいったなあ」男は途方に暮れたように肩を落した。
「前から頼まれていた物を持ってきたんだが。ようやく出来たのでね」
「お預りしましょうか」
「いや。やはり栄三さんに直接見てもらわないと」
「他の店員さんなら夜は戻りますが」
「栄三さんしか、わからないんだ」
男はもじもじと包みをいじった。
「君はいつからこの店に？」
「まだ半月足らずです」
「店番は面白い？」
「はい」

男は童顔だった。微笑すると目尻が下がって、お人よし丸だしの顔になった。
「仕方がない。出直そう。君、本の鑑定は出来るの？」
浩吉は正直に答えた。
「それじゃ、ここにある本」と傍らの書棚を指さした。「これと同じ物は、いくらで引き取る？」
「それなら、うちの売り値の半分でちょうだいします」
栄三に教えられた通りを告げた。
「半値か。少し色をつけないか」
「色？」
「お愛想にちょっぴり高く買ってくれということさ。今、持ってくる」
「色というんですか」
「そうさ。君は何も知らない坊やだね。かわいいね。じゃ、頼むよ」
男は雪駄の金具を鳴らしながら出ていった。
程なく、さきほどとは違う色の風呂敷を下げてやってきた。包みをほどいて、書棚の本と同じ本を取りだした。浩吉が売価の半額に、相手の言う「色」を添えると、男が喜んだ。浩吉は規定によって男から米穀通帳を見せてもらい、買い受け確認帳に記入した。古本は古物なので、

古物営業法で客の身元を確かめねばならないのである。これを怠ると、万一、買入れ品が盗品だった場合、お咎めを食う。浩吉は入店した翌日、まずまっ先に、このことをくどく栄三にたたきこまれた。

「ニセの名を使う奴がいるから、必ず証明書を見せてもらうんだ」

と言われた。

通帳の名は橋野豊一、三十五歳とあり、家族欄に、同ホリ子とあって、こちらには年と、続き柄は何故か記してない。住所は店のすぐ近くであった。道理で、じきに品物を取ってきたはずである。

通帳を返すと、橋野が、

「これは色のお礼だ」と机にイチジクの実を一個置いた。

「知っている、これ？」

「はい。田舎でよく食べました」

「ああ、よかった。食べられるんですか、どういう風に食べるんですか、って、よく聞かれるんだよ」

「東京でも売っているんですね」浩吉はつまみあげて、しみじみ眺めた。

「いや、そいつは買ってきたんじゃない。うちの玄関に木があるんだ」

「イチジクの木ですか？」
「ちょうど今、実をつけている。いや本当はそれは実じゃなく花らしいんだが。君、イチジク好き？」
「はい。大好きです。子供のころ食べすぎて、口の端がかぶれたくらいです」
「うれしいね。喜んでくれたのは君くらいだよ。君、うちに遊びにこないか？」
「はい？」
「口が腫（は）れるほど食べさせてやるよ。とても太い木でね。食べる人がいないものだから、ならせっ放しだ。もったいないんだよ」
「うかがいます」
「今夜でもいいよ。店を閉めたらおいで」
「はい。ただ、今夜は……」
「面白い本もたくさんある。見せてあげるよ。じゃ、待っている。いつでも構わんよ」
橋野は畳みかけるように言い、きびすを返しかけ、
「そうそう。お金はまだもらっていなかったね」
「いえ。渡しました。あの、色をつけて」
「失敬。どうも忘れっぽくなってしまって。失敬失敬」しきりに頭をかいた。

銭湯から戻ると、家にはトネが一人きりで、仲間は誰も帰っていない。トネは茶の間でラジオの歌謡番組に耳を傾けながら、漬け物にするらしい、バケツ一杯のラッキョウのヒゲをむしっている。

行こうか行くまいか迷っていたのだが、本を読む気分にもなれない。かといって寝るのも惜しい。誰かと話をしたい。そこで橋野家を訪ねることに決めた。トネに断って、出た。梅雨(つゆ)あけ間近の、いやに蒸し暑い晩である。

長屋の一軒であった。北向きの、陰気な家。

なるほど玄関の格子戸の横に、イチジクの木が、通せんぼのように枝を伸ばしているので、すぐわかった。小腰をかがめてくぐるとき、サンダルの先が地面にめりこんだ。暗くてわからなかったが、ぬかるみがあったのである。出来たばかりのそれでなく、年中ぐちゃぐちゃとぬかるんでいる様子だ。そういえば田舎でもイチジクの木が育っている場所は、青苔(あおごけ)のはびこっている湿地が多かった。

たてつけの悪い格子戸をようやく開けて声をかけると、女性の声がして、浩吉より四つ五つ年上の、和服の楚々(そそ)とした美人が現れた。色が白くて、どことなく面やつれしている。か細い声が、どうぞお上がり下さい、と勧めた。あらかじめ聞いていたようである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.